
戦場に懸ける意思

融電社

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場に懸ける意思

【Nコード】

N5352S

【作者名】

融電社

【あらすじ】

その世界で、あなたは、何を求めるのか。
その世界で、あなたは、何を選択するのか。
その世界で、あなたは、何の為に戦うのか。

戦場にて

朽ちかけの電腦世界で、人間は闘い続けていた。

虚無の果ての平原で。

計算され尽くされた森で。

住民の存在しない都市で。

生命を生み出さない海原で。

セラミックと鉄錆の砂漠で、
終わりのない世界で終わりの為の闘
いを続けていた。

めるのか。

その世界で、あなたは、何を求

めるのか。

その世界で、あなたは、何を選

に戦うのか。

その世界で、あなたは、何の為

多目的戦闘エリア 11・残存兵士数 2・戦
闘不能数 58・戦闘可能時間 6分51秒

跳弾した銃弾が機動服を掠めた。たとえそれが物理計算によって作られた虚構だとしても、私にとっては擬似的な『死』をもたらす回避すべき凶器にすぎない。

度重なる機銃掃射によって摩耗していくのは、私の鼓膜ではあるのだが銃弾は尚も私が隠れる遮蔽物——軍用車だったもの——越しに、無気質な突撃を繰り返していた。いまだ盾としての役割を保っているがいずれ削られる。

動いてはいけない、まだ、まだ。

落ち着け、息を吸え、息を吐け、止めて、3、2、1。

昔ながらの精神安定法、単純だが。効果は靨面だ。この世界では精神が物を言うのだから。

まずは、残敵の確認。手首に備え着けられた細長い蛇の様なファイバースコープカメラを使い、残骸の端からそれを伸ばしていった。これは中々便利なのだが解像度が低いのが難点だ、だが文句は言うまい。

凸レンズに映し出されたそれを、顔面を覆うフルフェイス型ヘルメットへと転送。目の前に半透明のウィンドウが表示される、先ほどから俺を狙い撃っている重歩兵を発見した。

距離。訳75m。俺と同じく二脚型、全身を武骨な板状の防弾スーツで包み、重機関銃を腰だめに構え撃ちまくる大男。

型式は、九龍工業公司製の三七式装甲強化服、獲物はベルトリンク式・背部から伸びた弾帯が重機へと伸びている。旧型の六〇式機銃だ。安い、頑丈、扱いやすいをモットーの九龍製。他企業のコピー商品にしてはいい出来だが劣化品と言えよう。索敵電子兵装については落第点が付けられるほどだ。

つまり所は、素人。安全を確保するためにガチガチに防御を固め、大型銃器を使い敵を見つけしだい撃ちまくる。実に単純明快だ。銃器の扱いも恐らくは自動照準装置の機械任せだろう、堅実な戦いだ。

そこに、付け入る隙がある。

手元に寄せた愛銃、Works・Arc社製・P901カスタム装弾数60発、6.5×35mm弾を使用。人体工学に基づいて造られ貫通性の高い弾丸で大抵の強化服は撃ち抜ける。長年連れ添った相棒である。

長方形型の本体から、僅かに突き出た銃身下部に備えられたグレネードランチャーの引き金に指をかけた。

今こそ勝負の時だと、本能が静かに告げる。

理性が叫ぶ、勝てと。
ああ、勝つさ。

排莢口から立て続けに流れ落ちる金色の屑星は、内部に蓄積した殺意を散らし徐々にその体温を下げていった。

そんな事には興味もないと、悪意の残滓の海で立ち続け、一方的な攻撃を仕掛ける一人の男。

彼には家族がいた、友がいた、妻がいた、子供がいた、高額の給金を得る為に戦場へと降りた。

身内には企業専属の戦場アドバイザーをしていると嘘を吐き安心させた事があり、彼は心が軋む音を聞いた。

それも今日で終わる。

奴を倒せば。今まで99人斃してきたのだから造作もない事だ。

稼ぐだけ稼いだならばこんな所に用はない。

安全な仕事に就くでしょう。愛する妻と子供の為に。

さて、そろそろ死んだか？　これだけ撃ちこめば、ハチの巣になっ
つていても可笑しくはないが。

歌姫の独奏が終わりを告げ、最後に排出された莢が澄んだ音色を響かせた。痛めた喉を休めるかの様に柔らかな硝煙をあげている。冷却装置作動開始。

こいつにはまだ歌って貰わないと困るからな、今の内に良く休め
さて。

熱感知機が装備されているのならば、確認するのは至極楽なのだ
が。安さが売りの九龍、そんな高性能を望むのは非常

に酷というものか。まあ兵器なんぞ所詮、消耗品に過ぎないからか、
高く作る意味がないのか。

しかたない。

「思考AI、光学カメラ用意。残存敵機を確認しろ」
『yes・Master』

電子工学のと共に発達したのは兵器だけではなく、錬度の低い兵士のサポート用に開発された自立思考制御兵装、思考AI。

自我と感情を与えられ、個々人に応じたカスタマイズを施し。主と共に戦う。

熟練の兵士となっても愛用する者が多く、時としてそれは『第二の戦友』呼ばれた。

『索敵開始』

眼前に映し出される映像を注意深く見る、完全に機械に任せるには心もとないので、最後に頼りになるのは人間の眼でたしかめねば。もはや人間の生存は絶望的であろう。これに耐えられるのは『地上最強』位のものだろうか、まあ出会う事はないだろうもし会ったならば俺は死ぬな。確実に。

その為に、事前に情報収集を徹底的に行い。名の知れた傭兵が出没するエリアを避け続けてきた。

自分よりも強い敵とは戦わない、戦場の鉄則だ。臆病だと同輩にからかわれるが、それで構わない。

俺は生きなきゃならないからな。

光学カメラに映し出された、もはや鉄屑と成り果てた元軍用車両。そこかしこに拳大の弾痕が刻まれ、重機関銃の本領を発揮したといった所だろうか。

これで100人。ノルマは達成だ、家に帰って美味しい飯が食える。そんな事を考えていた、それが彼の油断となった

弾丸は直線にしか進まない。直線にしか進まないのだから与えられた運動エネルギーが尽きるまで進む事を止めない。

残骸の真後ろに浅く掘られた簡易塹壕に隠れた彼には当たる事はなかった。

これまで耐えたかいがあったというものだ。

撃たれたら2倍撃ちかえす、この世の鉄則だ。

目にも魅せてやるぜ。

細かな砂利を含んだ塹壕からはい出て、残骸の一部に開けられた大穴に着いた、発砲の構え。

そこから。

太い銃口が突き出され、狙いは大男。

そして。

発射される40mmグレネード弾。

迫りくる死。

見開かれる眼。

僅かな狼狽。

『Enemy、Alert』Warning！
Warning！ Warning！
Warning！ Warning！

黙れ、警告停止。

畜生何で、生きてやがる。すぐに重機で迎え撃つ。こんな距離でグレネードとは、笑わせる。死ね。

じゃきり、と薬室に汎用重機弾が装填され。

両の手で固定された筒先が、飛翔する黒い弾頭を捉えた。

まずはグレネードを撃墜、そのままお前も喰ってやる。

『弾道補正開始、飛翔炸薬弾撃墜及び、敵機「機能停止」までの予測所要時間26・2秒』

『発砲、開始』

緩やかに放たれた7・62mm弾頭は、弾道制御され狙い定められた理に従い、黒い悪意に迫る。

衝突。

そして。

放たれる閃光、轟く衝撃音。

『system error, system error, system error, system error.....再起動開始』

三半規管を揺さぶられ目眩と吐き気がする。朦朧とする意識、それを上回る憤激が屈辱を晴らすべく起てと叫ぶ。

閃光.....音響弾.....だ.....と!?

糞が、だが火力ではこちらが上だ!!!

「自動照準解除、手動モード解放!。くばりやがれ!!!」
残骸へと連射される弾丸、だがそれらは当たることはない。そこに彼はいないのだから

人はいつからか空を見なくなった。

ばかり。

戦争に明け暮れ薄汚れた地上に嘆く

変化を求めず、変わらな

い、変わろうとしない。

だが、人は生きようとする、運命に

翻弄されようと。

だから、彼は戦うのだろうか？

ゆえに、銃を構えるのか？

人は屈服を良しとせず、足掻き、戦う。

『敵機反応を再確認』

「どこだ！」

『頭上です』

頂点に日光が射し、姿は見えず眼が眩む、それは男の不幸であり、彼の幸運。

一瞬の隙。それがあれば、残骸を踏み台として、大空へと跳ぶの

は機動服の脚力を以てすればさほど難しい事ではない、だが実戦でそんな事をする馬鹿はいない。大きく舞う人はそれだけで良いなのだから。

彼には経験が在った。

彼は幸運だった。

彼は選択した。

空へと跳んだ。

舞い降りる影、明確な意思と決

意を持つ者、それを。

風を切る黒い機体、着地点はすでに決めている。迷いなど欠片もない、心に満ちる意志が身体を突き動かす。

勝てと！ 勝利を！ 勝利を！ 勝利を

！ 打ち負かせと！

重力に従い、自重120Kオーバーの体躯は、全身全霊の蹴りと共に60式機銃をへし折った。

合金が砕け散り、細かな砂地に銃身は叩きつけられ、その歌声を止める結果となる。

武器破壊。

弾け飛ぶ銃身、ばら撒かれた薬莢が戦場を彩り、空へと高く舞う弾帯ベルトが日光を反射し眩しく光る

「あり……えん………」

茫然自失とする男の眼前に降り立つ漆黒の機体、二脚型。右手に突撃銃を構え、純粋な闘志を露わに、銃を向けた。暗い銃口が俺を見据えた。俺は。

「王手」

俺は、死ぬのか、そう思った。死ぬ時が来たのだと心のどこかで確信した。認めたくないが負ける時はこういう心境なものと、静かに納得し覚悟を決める。

『降伏を勧告します』

鼓膜に響く、機械音。俺の思考AIではない、敵機の思考AIか？ 降伏？ 何故此处まで詰めて置きながら撃たない。

『再度、勧告します貴方には降伏する意志が在りますか？』

「……………俺を……………殺さない……………のか？」

何故撃たないのか、ここは戦場だ。殺し殺される場所であり、命を賭けて戦うコロシアムだ。

人間の正気を保つ為に造られた、狂気の戦場。戦う事でしか精神の安寧を得る事のできない世界。何故だ。

「殺しは趣味ではないのでな。負けを認めろ」

黒のフルフェイスメットから、発せられる声。男だろうか、艶のあるだが力強い、声。

俺は生きて帰れるのか。妻に、子供に。

間違っていたのは、俺なのだろうか。血に塗れた手で我が子を愛せるのかと、いまさら疑問に思う。

『最終勧告です、従わない場合は、テメエの汚いハラワタをブチ撒ける事になりますか？……如何いたしますか？』

「待て、いつもお前は物騒だな、もう少し穏やかに説得しろ、エリザ」

『有機生命体風情には、この程度が『穏和』だと私は判断したのですが……。ご不満でしたら、5264パターンの説得方法がありますか？ 私のお勧めは、耳に』

「よせ。それ以上は言うな。解った……。帰ったらロクス・テックの天然オイルを投入してやろう」

『了解しました、ご主人様』

さて。

「貴様は、降伏するのか。今一度、問う」

眼前に向けられた銃器、愛用する武器は破壊され、打つ手はない。考えるまでもない。

俺は。

「降伏を、……………受諾する」

家族に会いたい、今はそう思うのみだ。

人は戦士と呼ぶのだろ

うか。

game set! winner「鴉」

多目的戦闘エリア11・戦闘不能者数59名・死亡者数0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5352s/>

戦場に懸ける意思

2011年10月9日00時26分発行